研究ノート

企業人と大学生の協働による プロジェクト型ボランティア活動

―中間支援NPOによる コーディネートの仕組みと活動の意義―

山岡義卓・高城芳之

要　旨

企業人と大学生の協働による障がい者団体へのプロジェクト型ボランティア活動（以下、本活動と言う。）を取り上げ、運営の仕組みと合わせて意義や可能性を考察する。

本活動は企業財団の助成により中間支援NPOがコーディネートした。中間支援NPOでは連携する障がい者団体の選定、学生の募集、プロジェクト全体の運営等を担い、企業側は労働組合青年部が窓口となって従業員の参加を呼び掛けた。

本活動に参加した関係者への影響は次のとおりで、中間支援NPOが入ることでさまざまな付加価値や波及効果が見込めることが示唆された。学生には、障がい者支援の活動への関心の高まりに加え、企業の社会貢献活動や働くこと等への理解が促されること、複数の異なる他者とのコミュニケーションを通じた学習ができること、企業人にとっては、学生が関わることによるチームづくりへの好影響、社内への波及効果、つながりの広がり、障がい者団体にとっては活動やつながりの広がり等の意義が見出された。こうした活動の実施に際しては企業と中間支援機関、さらには連携団体を含めた関係者との信頼関係の構築等の事前調整が重要だと考えられる。

キーワード：ボランティア　中間支援組織　CSR　企業財団　NPO

1　はじめに

企業が社会貢献活動の一環として従業員に対して地域活動やボランティア活動への参加を促す取り組みは、さまざまな形で広く行われている[1]。たとえば、従業員に対して参加可能なボランティア活動を紹介することや、地域のNPOとの連携活動、プロボノ活動の推奨等、さまざまな取り組みが行われている[2]。また、社会貢献という観点のみならず、広く社外の世界に目を向けることや、仕事以外の人とのつながりを得る機会に着目し、人材育成や福利厚生の意図をもって行われることもある[3]。

本稿で紹介する事例は企業の従業員（以下、企業人と言う。）によるプロジェクト型ボランティア活動であり、多様な企業ボランティアのひとつの事例ではあるが、大きく二つの特徴がある。ひとつは、企業がボランティアを受け入れるNPOと直接連携するのではなく、中間支援NPOが間に入ってコーディネートを担っていることである[4]。中間支援NPOが間に入るこ

1　日本経済団体連合会（2020）の調査によれば「社員による寄付やボランティア活動の推進」をしている企業は全体の87％、「社員によるプロボノ支援」は同じく33％である。

2　たとえば東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課（2018）による企業ボランティア事例集には、ボランティア休暇制度や社内サイトによるボランティア情報提供、活動に応じた資金援助、交通費の助成等、各企業のさまざまな取り組みが紹介されている。

3　労働政策研究・研修機構（2023）では、企業ボランティアの副次的効果として先行研究を参照したうえで「1）会社へのロイヤリティが高まり定着率が上がる、2）会社イメージが向上し優秀な人材が確保できる、3）異なるフィールドでの経験によって新たな能力を開発できる、4）定年退職後の生きがいにつながる」の4つをあげている。

4　たとえば東京・ボランティア市民活動センターが主催する「企業ボランティア・アワード」2022年度受賞事例では「地域の社会福祉協議会（社協）や市民活動センターなどの中間支援組織や行政から支援先を紹介してもらい」や、「本社が所在する品川区のしながわCSR 推進協議会より、区内の児童養護施設をご紹介いただき」等、企業のボランティア活動に中間支援機関が関与する事例も報告されているが、いずれも支援先の紹介にとどまり活動のコーディネートまで行っている事例は少ない。（https://www.tvac.or.jp/kigyo/case/award/　2023年9月22日アクセス）

とで多様な団体や活動への参加機会を提供できるし、事前準備やフォローアップ等を含めた連携先や活動内容に応じた相応しい支援が期待できる。

もうひとつは、本活動に大学生（以下、学生と言う。）が参加する仕組みを設けていることである。今回コーディネートを担った中間支援NPOは大学生のNPOインターンシップをはじめNPOと若者のつながりをコーディネートすることを主たる事業としていることから、企業人と学生が一緒に活動を企画する形でプログラムを設計した。また、活動への参加に加え、活動全体の企画・運営も学生スタッフが担った。

この関係を図にすると図1のようになる。中間支援NPOが複数のプロジェクトを含む全体を設計・コーディネートし、その中で個々のプロジェクトが行われた。

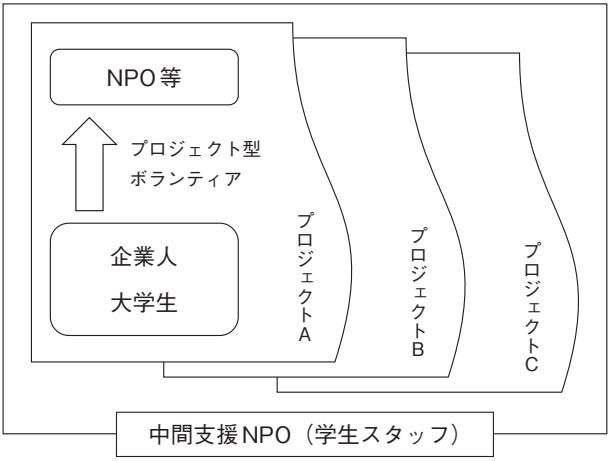

図1　中間支援NPOがコーディネートする企業人と学生による
プロジェクト型ボランティア活動

このような形態で企業人と学生が協働してプロジェクト型のボランティア活動を行うことは、企業人にとっては単にボランティア活動に参加するだけでなく、学生という立場の異なる他者と協力して活動する経験になる

だろうし、企業としては学生に企業理解を促す機会になることも期待できる。また、学生にとっては企業人との関わりは卒業後のキャリアを考える一助となるだろうし、企業人との共同作業から学ぶこと（プロジェクトや会議の進め方、企画のつくり方等）もあるだろう。さらに受け入れ団体にとっても多様な人たちとの関わりをもてることに加え、企業人、あるいは学生のみが行う活動とは異なる広がりが期待できる。すなわち、この形態ならではのさまざまな価値が生まれる可能性がある。

そこで本稿では、中間支援NPOがコーディネートした企業人と学生の協働によるプロジェクト型ボランティア活動（以下、本活動と言う。）の事例について、その運営の仕組みを紹介するとともに、関係者への影響を確認したうえで、このような形態の活動の意義や可能性を考察する。

2　本活動について

本活動は、ヤマト運輸労働組合の組合員[5]（以下、ヤマト社員と言う。）と学生が協働で、横浜市内の複数の障がい者団体[6]（以下、連携団体と言う。）の利用者に向けてさまざまなプログラムを行うボランティア活動で「ヤマト繋がるプロジェクト」の名称で実施されている。本活動はこれまで2021年度と2022年度に実施し、ここでは2022年度の活動を紹介する。

2.1　本活動の実施形態

2.1.1　本活動の関係者と役割

本活動は、公益財団法人ヤマト福祉財団の助成により、中間支援NPO

[5] ヤマト運輸労働組合はヤマト運輸株式会社に勤務する社員で構成する労働組合。本活動には同組合の組合役員（青年部）として活動しているヤマト運輸の従業員が参加した。

[6] 障がい者当事者団体と障害者支援団体の両方を含む。2022年度の連携先のうち横浜市中区地域訓練会チューリップと障害児者サークルラビッツは障がい者当事者団体、カプカプ川和は障がい者支援団体である。

である特定非営利活動法人アクションポート横浜が主催した。本活動に参加したヤマト社員はヤマト運輸労働組合青年部の呼びかけに応じて参加した。学生の募集と連携団体の選定はアクションポート横浜が行った。プロジェクトの企画運営はアクションポート横浜の学生スタッフが担った。ヤマト福祉財団は「障がい者の自立及び社会参加に関する各種の活動に対し幅広い援助を行い、もって、障がい者が健康的で明るい社会生活を営める環境づくりに貢献すること」(同財団定款より)を目的としていることから、本活動の連携先はすべて障がい者団体とした。

2.1.2　本活動の狙いと全体方針

本活動は次の3点を狙いとして実施した[7]。

〈本活動の狙い〉

1．社会人と学生が繋がり、多くの気づきが得られる協働作業の場をつくること。
2．コロナ禍での新たなオンラインボランティアを作り、地域の福祉活動に貢献すること。
3．参加者のボランティアへの関心と地域への関心を高めること。

また、2022年度は「あったかいの連鎖を生み出す」を全体方針として掲げ、「企画自体やそのための話し合い、それぞれの中で生まれるコミュニケーションを通して、お互いを理解し、想いを共有する。これらの行為の中で生まれる嬉しさや楽しさ、感動を意味する「あったかい」を、企画に関わる人同士でお互いに共有、もしくは他者にも伝えていくことを目指して」活動に取り組んだ。

2.1.3　本活動の進め方

5月から7月に参加メンバー（ヤマト社員、学生）を確定し、活動を企画するためのチーム（以下、このチームを企画チーム、企画チームのメン

[7] アクションポート横浜（2023）より。

バーを企画メンバーと言う。）を結成した。2022年度は3つの企画チームが活動し、各チームの構成は学生3～5人、ヤマト社員2人であった。8月から10月にかけて企画メンバーと連携団体で打ち合わせを重ね、団体側のニーズの確認や実施内容について意見交換し、企画案を詰めていった。また、企画メンバー以外の当日参加のボランティア（以下、当日ボランティアと言う。）をヤマト社員と学生の双方で募集した。各チームが準備した企画を11月に実施した。いずれもオンラインと対面参加のハイブリット型で実施した。活動終了後の翌年2月に関係者全員が集い成果報告会を実施した。

全体のスケジュールは図2のとおりである。

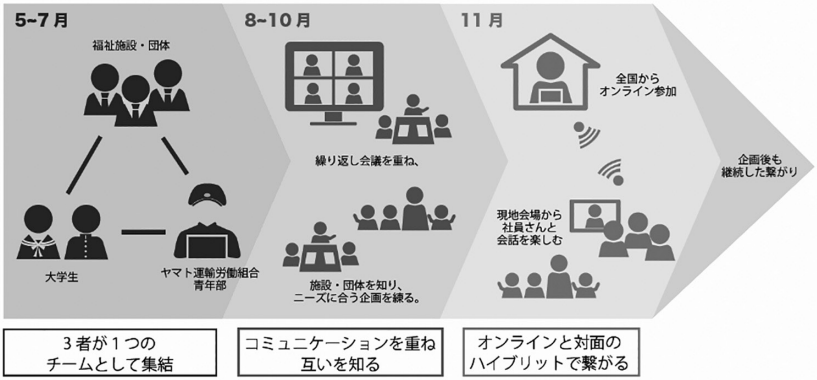

図2　本活動の全体スケジュール[8]

2.2　本活動の内容

2022年度に実施した3つの企画の概要は表1のとおりで、いずれも連携団体および参加者から好評を得た。

[8] アクションポート横浜（2023）より了承を得て転載。

表1　2022年度の企画実施概要[9]

	①科学であそぼう	②みんなであそBoccia	③アートで繋がろう
内容	紫キャベツのアルカリ酸性実験等の科学実験パフォーマンス	ボッチャを使ったゲームやオンラインお絵描き対決	絵の具や折り紙等の材料を使って“自分のきもち”をアートで表現
連携団体	横浜市中区地域訓練会チューリップ	障害児者サークルラビッツ	都筑区子育て支援センター Popola（ポポラ）、カプカプ川和
実施日	11月26日（土）	11月13日（日）	11月19日（土）
参加人数	企画メンバー 5人 （学生3人、ヤマト社員2人） 連携団体参加者 13人 当日ボランティア 20人 （ヤマト社員14人、学生6人）	企画メンバー 7人 （学生5人、ヤマト社員2人） 連携団体参加者 13人 当日ボランティア 17人 （ヤマト社員6人、学生11人）	企画メンバー 6人 （学生4名、ヤマト社員2人） 連携団体参加者 11人 当日ボランティア 24人 （ヤマト社員15人、学生9人）

①科学であそぼう

②みんなであそBoccia

③アートで繋がろう

図3　当日の様子

3　関係者への影響

本活動の関係者への影響を、企業人と学生が協働で行うという実施形態に着目して確認する。学生についてはアンケート調査、企業人（ヤマト社員）については本プロジェクトに主担当者として参加したAさんの執筆

[9] アクションポート横浜（2023）およびヤマト福祉財団（2023）に基づき筆者作成。

した記事、連携団体については成果報告会[10]におけるコメントを参照して確認する。

3.1　学生への影響

3.1.1　アンケート調査の方法

2021年と2022年度に本活動に参加した学生に対してインターネットを用いたアンケート調査を実施し、参加動機や参加した感想、大変だったこと、学んだこと等を確認した。調査は2023年8月に実施した。

3.1.2　調査結果

14人に調査依頼し11人より回答を得た。11人の内訳は運営スタッフ4人、企画メンバー7人、当日ボランティア4人であった[11]。

参加動機は「ボランティア活動に関心があったから」10人（90.9%）が最多で「NPOの活動に関心があったから」7人（63.6%）、「ゼロから企画を考えて実行できる活動だったから」5人（45.5%）、「友人や先輩に誘われたから」5人（45.5%）と続く。「社会人と一緒に行う活動だったから」は4人（36.4%）が挙げている。

参加した感想として全員が「障がい者支援の活動への関心が高まった」と回答した。「地域やNPOの活動への関心が高まった」、「企業が行う社会貢献活動への関心が高まった」、「プログラムの企画・運営の能力が身に付いた」と感じた学生がそれぞれ9人（81.8%）、そのほか「連携企業（ヤマト運輸・ヤマト福祉財団）への関心が高まった」7人（63.6%）、「就職活動に役立つ体験になった」6人（54.5%）、「働くことに対する理解が深まった」5人（45.5%）であった。

大変だったことは「当日の準備や運営」9人（81.8%）が最多で、「オン

---

[10]「2022年度ヤマト繋がるプロジェクト報告会」。2023年2月1日（水）に大倉山記念館にて実施。活動に参加した学生、ヤマト社員、連携団体はじめ本活動の関係者が参加した。

[11] 2021年度に企画メンバーとして参加し、2022年度は運営スタッフとして参加した等、複数の立場を経験している学生を含むため、合計は11人にならない。

ラインでのコミュニケーション」8人（72.7％）、「連携団体との連絡や調整」6人（54.5％）、「当日ボランティアの募集」6人（54.5％）、「ヤマト社員との連絡や調整」4人（36.4％）、「学生同士の連絡や調整」4人（36.4％）と続く。大変だったことの具体的内容（自由記述）は、次のとおりで、企画メンバーは各方面とのコミュニケーションや調整に関すること（下線で明示）を多く挙げている。

活動中大変だったことの具体的内容（自由記述：抜粋）

- 連携先との調整です。連携先のニーズに合わせて自身はもちろん、学生ボランティアや会場施設、事務局と連携しながら常にどこかと調整をすることが大変でした。サンタの企画で､2日程とその後をどのようなストーリー性をもたせて子どもたちに楽しんでもらえるか考えるのが苦しくもあり面白かったです。（運営・企画・当日）
- 連携団体が2つあったため連絡や調整は尚更難しく感じました。しかし、報告・連絡・相談という社会人にとって大切なことを学ぶことができるとても良い経験だったと思います。（企画・当日）
- 1つのチームに関わるステークホルダーがとても多かった。活動時間がバラバラな為、全員が集まって話すことが難しく、平日昼間は連携施設×学生。夜や土日はヤマト社員×学生と分けて打ち合わせを開いた。施設との打ち合わせ内容をヤマト社員に共有し、そのまた逆も逐一共有。やりがいはあるが、その分何か1つを話し合い、決めるだけでも相当な準備、時間を要した。（企画）
- 私自身が当日の判断でと思っても、ヤマトやアクションポートとしてはあらかじめの提出が必要だったり、反対に先に決めておきたいと思っても、施設さんとしては当日の判断でなど、複数のアクターが関わっていることでの、考え方や方法のズレと、その擦り合わせが大変だった。（企画）

注）各記述の末尾に（　）で以下の略語で回答者の本活動への関わり方を示した。
運営：運営スタッフ、企画：企画メンバー、当日：当日ボランティア

この活動から学んだこと（自由記述）は次のとおりで、自分と異なる他者との出会いや相互理解、コミュニケーションに関すること（下線で明示）が多い。

本活動から学んだこと（自由記述：抜粋）

- 自分が起点となって沢山の人を動かすために必要なこととして、①発する言葉に一貫性があるか（⇔相手がすんなり納得できるような発言を心がけているか）　②必要な情報が関係者全員に十分に行き渡っているか　③関係者の意見をどれだけ多く取り込むかの3つが成功に大きく寄与すると感じました。（運営）
- 福祉や企業の存在が目に見えるようになったことが、私にとっての1番の成長だったと思います。「見えるようになった」というのは、（本当にお恥ずかしい話ですが）今までは全く見ようともできていなかった部分に、気づいて、気にかけるようになって、それが習慣づいたから起こることだろうと思います。それまでは関わりのなかった、福祉や企業、財団、横浜…など、沢山のものに目を向けるきっかけとなってくれました。（運営・企画）
- 自分の意見や思いをうまく伝えて周りを動かす難しさとそれができたときの実感、達成感は他の誰にも経験できないものだと思います。あとは、他者を理解することです。知らなければただの他人だったであろう人たちを知るためのきっかけを作ることや根気強く知ろうとし続ける力は、社会で生きるために必要なものであり、貴重な経験ができました。（運営・企画・当日）
- 自分の気持ちを内に秘めているだけではなく、相手にしっかり伝えることの大切さを学びました。1人1人が自分の気持ちをチーム全体に共有することができるようになってからチームが1つにまとまったように感じます。（企画・当日）
- 普段の学生生活では交わることの無い方とたくさんの出会いがあった。施設職員やヤマト社員など、社会人の方と密にコミュニケーションをとることで、自分の視野が大きく広がった。（企画）
- 施設の利用者さん、当日ボランティアなど、誰を対象に何を伝えるか、それはどうしたら伝わりやすいかを常に考えていたことで、相手に合わせた伝え方ができるようになった。（企画）
- チャレンジ精神や主体性が磨けたと感じる。このプロジェクトは学生とヤマト社員さん、施設さんとの試行錯誤の連続のため、自分の意見を言う、提案する、やったことのない分野にチャレンジする機会は多い。（企画）

注）各記述の末尾に（　）で以下の略語で回答者の本活動への関わり方を示した。
運営：運営スタッフ、企画：企画メンバー、当日：当日ボランティア

3.2　企業人への影響

本プロジェクトに主担当者として参加したヤマト社員のＡさんは2023年7月に本活動を通して得たこと、思い等を記載した文章を寄稿している[12]。この原稿から本活動への影響に関わる部分を抜粋、要約する。なお、同原稿からの引用は“　”で囲い下線を付す。

- 会社からメンバーに任命され最初は「言われたからなんとなく」に近い感情で本活動に参加した。
- 学生たちとの関係は会議を重ねるごとに打ち解けていったが、“それは学生たちが積極的に歩み寄ってきてくれたからこそ”だと感じている。学生から相談されることで“頼ってくれる学生たちに「答えなきゃ、考えろ自分！」という思いと、アドバイザーというちょっと上からな役割ではなく「一緒に作り上げたい」というチームの一員としての思いが次第に芽生えて”いった。
- “よくコミュニケーションをとって、考えをぶつけあえる関係性”ができていたので、“休みの日の活動はもちろん、仕事を終えて急いで退勤してZoomに参加すること”もあったが“ネガティブではなくむしろポジティブに、ウキウキわくわくしながら参加でき”た。
- 本活動終了後も学生たちとのつながりは続いており“他のプロジェクトにお声掛けいただいたり、卒業する学生の送別会に参加したり”しており、このことも魅力のひとつだと感じている。
- この関係は、“会社という組織ではなかなか築けない関わりあい”であり、“私だけ独り占めするにはもったいない、このプロジェクトをより多くの青年部に体感してほしい、「継承」していくことがこれからのミッション”だと考えている。
- 社員には“普段の業務とはかけ離れた非日常・新鮮な時間をうまく楽しんで”欲しく、楽しむための方法として、“①ヤマト（会社）から切り離して考えること　②「わくわく感」を感じること　③遠慮しないこと”の3つが重要だと感じている。

[12] note アクションポート横浜活動報告「【ヤマト繋がるプロジェクト】ヤマト社員村上さんの想い」2023年7月12日投稿
https://note.com/apyyokohama/n/n2bc71691f41b?fbclid=IwAR1ccmTMNTiJI3eHD08dcd-w3KKXMnrvjwCinlfOSiaGmHzk4ML3BWJZTJ4（2023年9月22日アクセス）

以上のように、最初はなんとなく参加した活動であったが、学生たちからのはたらきかけもあり良い関係ができ、ポジティブな気持ちで参加できたこと、その後も関係は続いており、今は他の社員にも同じことを経験してほしいと感じていることが確認できる。

3.3　連携団体への影響

成果報告会において連携団体の担当者から本活動に対するコメントが述べられた。その中から本活動の影響に関わる部分を抽出して項目ごとに整理した。(表2)

表2のとおり、連携団体ではこれまでしたことがない活動が行えて活動が広がったこと、多様なボランティアが参加することでつながりに広がりができたこと、若者（特に学生）との関わりを持てたことをプラスの影響として受け止めていることがわかる。

4　考察

関係者への影響からうかがえる本活動の意義と可能性について考察する。

4.1　学生にとって

アンケート調査の結果から、本活動に特徴的な意義として次の3点がうかがえる。

①企業の社会貢献活動や働くこと等への理解促進

②複数の異なる他者とのコミュニケーションを通じた学習

③参加学生の広がり

障がい者支援施設でのボランティア活動なので、全員が「障がい者支援の活動への関心が高まった」と感じたのは必然であるが、企業の社会貢献活動や企業への関心、働くことへの理解が喚起されたのは企業人との協働で行う本活動ならではの変化であろう。

また、こうした多様な立場の人たちが集まって行う活動にはコミュニケーション上の困難が多くある。しかし、学んだことの多くもコミュニケー

表2　連携団体のコメントのうち本活動の影響に関する発言

項目	関連するコメント
活動の広がり	• いつもの活動にはない内容。また学校の授業等で科学や理科の実験等に触れることが少ない子どもたちなので実験の工程を興味深く観察したり、色や性質の変化に目を見張ったりと初めての経験を楽しんでいるようでした。（チューリップ） • このプロジェクトに参加した経験が新たなものや学校の授業等へ興味を引き出すきっかけにつながるものとなったのではないかと思います。（チューリップ） • 会としての活動であったならば母たちが企画運営をする今までだったので、無理と思われることはまったくしないであきらめるのが会の常なのですが、さすが若者たちは違うと思いました。（ラビッツ）
つながりの広がり	• いつもの活動とは違う数多くのボランティアの皆さんと同じ時間を共有することやオンラインを利用したやりとりも子どもたちにとっていい刺激となったと思います。（チューリップ） • このプロジェクトに関わってくださっているこんなに多くの皆さんとご縁ができたことが「ヤマト繋がるプロジェクト」そのものではないかと思います。（チューリップ） • 一番は父、母、家族、先生、事業所の職員さんとかではない人たちと関わる機会を持てたことです。同年代の人たちと関わる社会への第一歩。こういう子たち、家族はどうしても限られた社会で生きている感じがします。もっともっと多くの人たちが障害のある人たちと関わって知ってもらう。そういう機会があると増えるといいと常日頃思っています。（ラビッツ）
若者との関わり	• 未就学児のお子さんが来る場所なので、学生さんと関わるのが初めてのようなことでした。何度も顔合わせて、お話をするうちに我が子のような気持になりました。（ポポラ） • 先日も遊びに来てくれて、その後、広場に入ってくれて、子どもたちに大人気で「今度は僕のうちに遊びに来て」とラブコールを受けているところをまのあたりにし、やはりお兄さんお姉さんは人気だなと感じたところです。（ポポラ） • 実際にカプカプに何度も来ていただいて、うちのメンバー、すごくみんな彼ら彼女たちのことが大好きになったんです。終わってからもずっと言ってます。「いつ来るんだ」って。（カプカプ川和）

ションに関することで、困難があるがゆえの学習効果であることがわかる。加えてこうした困難をそれなりの時間をかけて越えていく過程において、より深い理解や関わりが求められ、それがたとえば「見えるようになった」というような記述、すなわち①の企業の社会貢献活動や働くこと等への理解促進や活動そのものへの理解につながっていると推測される。

③については、ほとんどの学生の参加動機はボランティアやNPOへの関心であるが、社会人と一緒に行う活動であることも3割以上が挙げており、企業人が活動に関わることで参加学生の範囲が広がる可能性がある。

4.2　企業人にとって

Aさんの原稿から、学生とともにプロジェクトを進めることの意義として次の3点がうかがえる。

①チームづくりへの好影響

②社内への波及効果

③つながりの広がり

最初は言われてなんとなく参加したが、学生が頼ってきたり、積極的に歩み寄ってきたことで、チームの一員としての意識が芽生えたと述べている。「よくコミュニケーションをとって、考えをぶつけあえる関係性」や「ポジティブに、ウキウキわくわくしながら参加」することは「会社という組織ではなかなか築けない関わりあい」であったと振り返っており、学生という社外の年少のメンバーがいたことの影響があったと推測される。すなわち学生が関わることがチームづくりに好影響をもたらしたと言える。

また、本活動を「「継承」していくことがこれからのミッション」と述べていることから、社内への波及効果が生じていることがわかる。本活動への参加が同社社員に有意義だと感じるからこのような意識が生じたのであろう。

Aさんと学生たちとの交流は本活動終了後も継続している。学生からの「声掛け」等のアプローチや、アクションポート横浜が多様な活動を抱えていることがつながりの継続や拡大に寄与していると推測される。また原

稿には明確に記載はないものの、つながりが広がる前提としてNPOや地域の活動への理解や関心の高まりがあったことがうかがえる。良好な関係のチームで充実した活動ができたことが理解や関心を高め、その後の交流につながっていったのであろう。

なお、ここでは企業人への影響として考察しているが、従業員にこのような意義がもたらされることは、企業にとっても望ましいことと考えられる。

4.3　連携団体にとって

成果報告会のコメントから、活動が広がったこと、つながりが広がったこと、若者と関わりがもてたことをプラスの影響と受け止めており、これらがそのまま団体にとっての意義になると考えられる。

活動の広がりについては、学生、あるいは企業人のみとの活動でも得られるが、両者が同時に入ることでその幅はより広がる。つながりの広がりについては、連携団体は多様な人たちが障がい者と関わることを望んでおり、本活動を通じて学生とも企業人ともつながれることが意義となる。

5　まとめ

企業人と学生の協働によるプロジェクト型ボランティア活動の事例を紹介し、その運営方法や意義について考察した。本事例では、中間支援NPOを介して学生と協働することにより、特徴的な意義や波及効果が見込めることが確認できた。

他方で中間支援NPOが間に入りさえすればよいということではなく、何を期待するのかによって相応しい形態は変わってくる。本事例では、ヤマト福祉財団が大切にしてきた障がい者支援というテーマで、ヤマト社員と学生が一緒に企画づくりから取り組むことにより、ヤマト社員にとっても、また連携団体にも意義のある活動になると考えられたことから本活動が実現した。すなわち、ヤマト福祉財団とアクションポート横浜の相互理解のもとにそれぞれ期待をもって事業が始まっている[13]。もちろんやって

みないとわからないことも多いが、事前の段階で双方の狙いを明確にすることが肝要で、そのためには信頼関係の構築を含めた事前調整が重要となる。

企業と地域やNPOとの連携・協働は、企業から見ればCSRや従業員の能力開発等の観点から、地域やNPOから見れば人、資金、ネットワーク等の確保や充実の面から、これまで以上に求められていくのは確実であろう[14]。その際、企業とNPOの一対一の直接的なつながりだけでなく、中間支援組織も含め、たとえば本事例で言えば学生と協働する要素を取り入れるなど、多元的な活動にしていくことは、関係当事者にとって、また、社会全体にとっても活動の価値を高めることにつながると考えられる。

今回紹介した事例は前述のとおり2021年に開始し、現在3年目のプログラムが進行中である。活動を継続する中で運営方法の改善が図られ、また新たな価値に気づかされることもあるだろう。本事例に限らずさまざまな試行が重ねられ、企業人によるボランティア活動の新しい可能性が拓かれていくことを期待する。

謝辞

本活動にご協力いただいた連携団体の皆様、参加いただいたヤマト運輸労働組合青年部の皆様、学生の皆様、ならびに本事業にご助成いただいた公益財団法人ヤマト福祉財団の皆様に心よりお礼申し上げます。

---

[13] ヤマト福祉財団とアクションポート横浜との連携経緯について本稿では説明していないが、両者の最初のコンタクトは2019年であり、そこから情報交換、事前調整、準備を経て2021年度より本事業が開始した。

[14] 日本経済団体連合会（2020）の調査結果では「社員の社会貢献活動（寄付やボランティア）」を企業が支援する理由として2020年度は93％の企業が「社員による地域社会への貢献」をあげており、2005年度調査の20％から大幅に上昇している。また、「社員の課題発見力、社会的課題に対する感度の向上」も2020年度は71％で、2007年の20％から大幅に上昇している。社会貢献と能力開発の両面で期待が高まっていることがわかる。

参考文献一覧

アクションポート横浜，ヤマト繋がるプロジェクト2022年度報告書，2023年
東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課，企業が進める社員のボランティア活動に関する事例集―社員のボランティア活動とその活動を支える仕組み―，2018年
日本経団連社会貢献推進委員会，CSR時代の社会貢献活動　企業の現場から，日本経団連出版，2008年
日本経済団体連合会，社会貢献活動に関するアンケート調査結果，2020年
ヤマト福祉財団，ヤマト福祉財団News，No.77，2023年
労働政策研究・研修機構，企業で働く人のボランティアと社会貢献活動―パラレルキャリアの可能性―，労働政策研究報告書No.225，2023年